

「からだもいじめるも支える リフト」を発信したい



ヤマシタ神戸営業所に勤務する廣田有香さんは、新卒で同社に入社して今年5年目の福祉用具専門相談員だ。今回の研究大会では、廣田さんが3年目に担当したリフト導入の事例を発表する。

特養に入所だった利用者Aさん（80代女性）は、レビー小体型認知症で要介護5の重度者だったが、家族の強い希望もあり、退所して在宅へ戻ることとなった。「特にスリングシートは色々な製品を試しました」と廣田さんは振り返る。Aさんは言葉での意思疎通が困難。表情や動きから、痛みや不快さを感じていないか観察した。皮膚もあまり強くなく、通気性が良くなかったり、シートの縁が少し硬

かったりするとか、発赤ができてしまう。その都度、廣田さんのもっとAさんが快適に移乗できるスリングシートがないかを調べ、メーカーに問合せた。退所前後の3カ月をかけたかいかあって、メッシュ地で布も柔らかく、Aさんにより適したシートにたどりの着くことができた。家族へリフト操作を指導する際は、安全に使うための方法は当然伝えるが、「難しいぞ」「無理かも」と思われないように平易な説明を心掛けました」という。

このAさんのケースを発表演題にした理由を尋ねると、リフトへの強い思い入れを話してくれた。「当社はノーリフトティンクポリシーを掲げているので、研修などでその理念に元々共感していました。またAさんも含めて、リフトを導入した担当ケースで、ご本人とご家族の双方に負担が軽減されて、ゆとりや余裕が生まれる場面を実際に見てきたため、在宅でのリフト活用がもっと進んでほしいと

さらに強く思うようになりました。ご本人も『抱え上げさせて悪いな』といった負い目をいつも感じてしまうのは辛いですよね。現場で実感したリフトの有用性を発信したい思いから、演題は「からだもいじめるも支える、リフトのある暮らし」に決めた。

廣田さんは、今回の大会テーマでもある「根拠に基づいた福祉用具の活用」に触れ、「今後は団塊の世代で介護を必要とする方が増えていきます。価値観はますます多様化し、身の回りのことにもこだわりを持つ方も多いでしょうし、パソコンやスマホを使って自分で福祉用具の情報を集めることもできます。それを踏まえると、今以上に選定の根拠や説明能力が問われることになると思います。そうした人にも、しっかりと納得感を持って福祉用具を選んでもらえるように支援できる福祉用具専門相談員を目指していきたいです」